

国語科学習指導案

日 時 平成27年6月4日(木) 公開授業 I
学 級 岩手大学教育学部附属中学校
3年A組39名
会 場 3B3C教室
授業者 中村正成

1 単元名・学習材名 書評に挑戦! 「高瀬舟」
中心学習材 森鷗外「高瀬舟」(『中学生の国語 三年』三省堂)

2 単元について

(1) 学習者観

昨年度、学習者は文学的文章として『走れメロス』『小さな手袋』『蒼いみち』などを学習した。これらの学習を通して、登場人物の心情の変化をとらえたり、登場人物のものの見方や考え方や生き方を読み取り、自分の考えを深めたりすることができた。

今年4月に行われた全国学力学習状況調査のB問題の3の設問一・二では、表現の工夫について自分の考えをもつことができるかどうかを見る問題が出された。この問題は4択問題であったが、通過率はどちらも90%を超え、筆者の表現の特徴やねらいについて、多くの生徒が根拠を考えながら自分の考えをもつことができるということが分かった。一方で、同3の設問三では、文章の中の構成や展開を踏まえ、根拠を明確にして自分の考えを書くことができるかどうかを見る問題が出されたが、この問題の通過率は61.1%と設問一・二に比して低かった。この問題は記述式であるが、誤答の例としては、話の展開を取り上げずに自分の意見を述べているものや、理由を示していないものであった。このことから、文章の構成や展開、表現の仕方について、その良さには注目しているものの、それについて自分なりにしっかりとした根拠を持ちながらまとめ、説明する力については課題があるということが分かった。

また、生徒質問紙の結果を見ると、多くの生徒が「国語の勉強は大切だ」「国語の授業内容はよく分かる」と感じているのが分かる。しかし、その一方で「国語の勉強は好きだ」と思っている生徒は6割に満たない。授業では、読みの一方的な押し付けにならないように留意しながら、他者との交流を通して、物語には多様な読みがあるということの楽しさを味わわせたいものである。

そのために、「主体的に課題を持ち、根拠を示しながら『批判的に』読む学習者」、「協働思考により、読みを深める学習者」を、目指す学習者像として授業を構想していきたいと考える。

表 全国学力学習状況調査の生徒質問紙の分析結果(数値は%)

質問内容	当てはまる	どちらかといえば、当てはまる	どちらかといえば、当てはまらない	当てはまらない
国語の勉強は好きだ	17.7	41.1	32.4	8.8
国語の勉強は大切だ	61.8	35.3	2.9	0.0
国語の授業内容はよく分かる	32.4	58.8	8.8	0.0
読書は好きだ	50.0	17.6	20.6	11.8

国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ	50.0	29.4	17.7	2.9
国語の授業で目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている	23.5	47.1	29.4	0.0
国語の授業で意見などを発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫している	29.4	44.1	26.5	0.0
国語の授業で自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気を付けて書いている	32.3	35.4	32.3	0.0
国語の授業で文章を読むとき、段落や話のまとまりごとに内容を理解しながら読んでいる	26.5	58.8	11.8	2.9

(2) 学習材観

本単元では、学習指導要領、国語科第三学年の目標「(3) 目的や意図に応じ、文章の展開や表現の仕方などを評価しながら読む能力を身につけさせるとともに、読書を通じて自己を向上させる態度を育てる」ために、言語活動として『高瀬舟』の書評を書く」ことを設定し、書評を書くために読みを深め、作品を評価していく学習を進めていく。

中心学習材である『高瀬舟』は、日本近代文学を代表する森鷗外の作品である。高瀬舟とは、徳川時代に遠島に決まった京都の罪人を大阪まで護送するのに使われた舟である。この舟に、これまで類のない、珍しい罪人が乗せられた。名を「喜助」といい、30歳ばかりになる、住所不定の男である。「喜助」が弟殺しの罪人だということだけを聞かされた同心「庄兵衛」は、「喜助」が「額は晴れやかで、目にはかすかな輝きがある」「いかにも楽しそう」な様子を見て、「この男はどうしたのだろうか」と不思議に思い、「喜助」に「おまえ何を思っているのか」と尋ねる。「喜助」は、今まで「自分のいていい所」もないまでの苦しみを味わってきたが、お上から「いろとおっしゃる」所に「落ち着いていることができ」ることがありがたいと語る。さらに、二百文という鳥目をもらい、これを「仕事の元手にしようと楽しんでいる」と続ける。「庄兵衛」はこれを聞き、「足ることを知っている」「喜助」と自分との間に大きな「懸隔」があることに気付く。「庄兵衛」はさらに、「喜助」に弟殺しのいきさつを尋ね、「喜助」はこれに答える。「庄兵衛」はこのいきさつを聞き、「これがはたして弟殺しというものだろうか、人殺しというものだろうかという疑い」が生じる。さらに、「いろいろ考えてみた末に、自分より上のものの判断に任すほかないという念」が生ずるが、「まだどこやらふに落ちぬものが残り、「お奉行様にきいてみたくてならなかった」と語り手は語る。

鷗外はこの作品について、『高瀬舟縁起』の中で『翁草』の「流人の話」をもとに書いたと語っており、ここには「財産と云ふものの概念」と「ユウタナジイ（安楽死）」という「二つの大きな問題が含まれている」と語っている。確かに、『高瀬舟』からも「知足」と「安楽死」という二つの主題は読み取ることができる。しかし、『高瀬舟』には『翁草』にはない人物設定の在り方や、表現、構成や展開の仕方があり、そこに鷗外作品の味わい深さ、あるいは鷗外の意図が隠されているように思われる。

例えば、この作品は、傍線で区切られた四つの場面から成り立っている。そして、その全体を〈語り手〉が語るという構造になっている。この〈語り手〉は、小説の外側からその世界を統括して語っているように見えるが、所々で「庄兵衛」の思いがそのまま地の文になって表れている。これによって〈語り手〉は自らの語りの中に「庄兵衛」の世界を含むことになり、「庄兵衛」に向かって語られる「喜助」の言葉が「庄兵衛」にどのように受け取られたかが読者に直接提示される。そして、いつしか読者は「庄兵衛」の目線で「喜助」

を見、「喜助」の行動について考えることになる。

また、『翁草』では特に情景描写は描かれていないが、『高瀬舟』では、「空一面を覆った薄い雲が、月の輪郭をかすませ」や「ただへさきに割かれる水のささやきを聞くのみである」、そして最後の「しだいに更けてゆく朧夜に、沈黙の人二人を乗せた高瀬舟は、黒い水の面を滑っていった」という表現がある。このような点に注目し、それを分析することで、さらに読みを深めることができるように思われる。

本単元では、「『高瀬舟』の書評を書く」という単元を貫く言語活動を設定した。書評は、ある本を取り上げて、その本の特徴や魅力などを評価して論じたものである。新聞などに掲載される書評は、読者にとって、どんな本を読むかを定める手がかりとなる。そこには、読者という相手意識があり、本を紹介するという性質を含んでいるが、今回ここで書く書評は『高瀬舟』にはどのような特徴があり、どんなよさや価値があるのかを自分なりに評価して、クラスメイトあるいは同学年の生徒に伝えるものであるとする。これを書くためには、評価の根拠を自分なりに捉え、整理し、読み手に伝えなければならない。生徒はそのために、評価のよりどころを作品に求め、熟読する。書評を書くためには様々な分析の視点があるが、今回は単元の目標に照らし合わせ、一般の書評にあるような作家論的な視点は排除し、「登場人物の設定」「構成や展開、表現の仕方」に着目した「書評」を書かせたい。ただし、生徒は書評に触れるのが初めてであり、分析的に読むことに慣れていないため、いきなり書評を書くことは難しい。そこで、第一次で初発の感想を書かせるときに『高瀬舟』にはどんなところに面白さがあり、素晴らしさがあるか」という視点で書かせる。そして、その感想と実際の『高瀬舟』の書評を読み比べながら、どのように書けば書評に近づくことができるかを考えさせる。ここでは、分析の視点と、作品を評価するためには客観的な根拠が必要であることをおさえさせる。それを踏まえ、自分の評価と、『高瀬舟』の書評の評価を比べながら、『高瀬舟』を改めて読み、自分なりの『高瀬舟』への評価を再構築させていく。そして、自分が着目した部分が、どのような効果を生み、どのような価値があるかを捉えさせ、それを他の学習者と交流することで、個々では気付かなかった作品の価値や多様な読み方を知り、幅広く読むことができることを期待している。

(3) 「学びの本質」について

学習指導要領の中学校第三学年の「C読むこと」の目標は、「目的や意図に応じ、文章の展開や表現の仕方などを評価しながら読む能力を身につけさせるとともに、読書を通じて自己を向上させようとする態度を育てる。」である。前半部分の能力とは、義務教育の最終段階として、小学校や中学校第一・二学年で学習した内容を総合的に踏まえ、様々な文章をある視点にたって分析したり批評したりして読む能力である。これからの社会においては、様々な場面において自ら価値判断をし、実生活において目的に応じて活用していくことが求められる。国語の教室の場面でも、自ら課題を持ち、協働的な学びを通して、判断しながら読んでいくことが必要である。その際に必要な「批判的に読む力」の育成について取り組むことが「学びの本質」と捉える。

「学びの本質」を追究するための学習者の学びのプロセスを、本単元では以下の通りに考える。

① 学習の見通し

ア 「教科の本質」

『高瀬舟』の登場人物の設定、構成や展開、表現の効果を考えて作品を読み深めるために、読みの視点を捉える目的で書評を分析し、それを手がかりとして『高瀬舟』を読む。

イ 「学びの本質」

何に注目して読むかという視点を明確にしながら学習の見通しを持つ。また、協働思考を通して、

読みをさらに広げていく。

② 学びの手がかり

文学的文章の学習事項

- ・登場人物の設定の仕方（人物像・小説における登場人物の役割）
- ・構成や展開（冒頭の入り方・末尾の結び方・語り手の視点）
- ・表現（表現技法・表記・和語・漢語・外来語）

③ 読解Ⅰ（「自立した読者」としての読み）

二年次の既習である登場人物の言動の意味を考えると、また文章の構成や展開、表現の仕方に着目して読むことを発展させ、登場人物の設定の仕方、構成や展開、表現の仕方について根拠を示しながら評価する。

④ 読解Ⅱ（協働的な読み）

他者の考えと聞き比べながら、自分の考えに取り入れる考えや、他の見方・考えはないか再考し、作品の評価について根拠を明確にしながら再構築する。

⑤ 学びの振り返り

作品を評価するために、どこに根拠を求めて評価したのかを文章化することで、学びのメタ認知を図る。

3 単元の指導目標及び評価規準

(1) 指導目標

- ①作品への評価の根拠を明らかにさせながら作品を読み返させ、交流させることで作品に対する考えを深めさせる。【国語への関心・意欲・態度】
- ②登場人物の設定の仕方について、根拠を示しながら作品を評価させ、自分の考えをまとめさせる。【読むこと イ】
- ③構成や展開、表現の仕方について根拠を示しながら作品を評価させ、自分の考えをまとめさせる。【読むこと ウ】
- ④小説における言葉の意味や作品を評価する言葉について理解させ、内容の理解や作品に対する自分の評価に役立てさせる。【言語についての知識・理解・技能】

(2) 評価規準

ア 国語への関心・意欲・態度	イ 読む能力	ウ 言語についての知識・理解・技能
・評価の根拠を明らかにしながら作品を読み返し、交流することで作品に対する考えを深めようとしている。	・登場人物の設定の仕方や、構成や展開、表現の仕方について根拠を示しながら作品を評価し、自分の考えをまとめている。	・小説における言葉の意味や作品を評価する言葉について理解し、内容の理解や評価に役立っている。

4 単元の指導計画及び評価規準（6時間）

		学習目標	評価規準	評価方法
第一次	1	<ul style="list-style-type: none"> ・本単元の学習活動についての見通しを持つことができる。 ・『高瀬舟』を読み、感想をまとめることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の見通しを捉え、積極的に学習に取り組もうとしている。【ア－①】 ・『高瀬舟』を読み、感想をまとめている。【イ－①】 	<ul style="list-style-type: none"> ・観察 ・記述の分析
	2	<ul style="list-style-type: none"> ・感想が、どのような視点で書かれているかを読む。 ・『高瀬舟』について書かれた書評を読み、どのように書けば書評に近づくことができるかを考えることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小説を読む視点をおさえながら『高瀬舟』を読もうとしている。【ア－②】 ・小説を読む視点として、構成や展開、表現の側面から『高瀬舟』を読み、評価の根拠を探している。【イ－②】 ・書評における評価語の意味について理解している。【ウ－①】 	<ul style="list-style-type: none"> ・観察 ・記述の分析 ・発言の内容
第二次	3	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスメイトの感想を書評にするために、その評価の根拠となる構成や展開、表現についてまとめることができる。 ・自分の感想を書評にするために、『高瀬舟』の書評と読み比べながら、その評価の根拠となる構成や展開、表現の仕方や登場人物の設定についてまとめることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作品への評価の根拠を示しながら、作品を読もうとしている。【ア－③】 ・作品への評価の根拠となる構成や展開、表現の仕方や登場人物の設定の仕方について、自分の考えをまとめている。【イ－③】 ・書評における評価語の意味について理解している。【ウ－②】 	<ul style="list-style-type: none"> ・観察 ・記述の分析 ・発言の内容
	4 (本時)	<ul style="list-style-type: none"> ・前時に自分が考えた作品への評価とその根拠についてクラスメイトと交流し、その根拠の妥当性を考えながら、自分の考えをまとめることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを具体的にもって交流し、考えを深めようとしている。【ア－④】 ・構成や展開や表現や登場人物の設定について具体的な根拠をもちながら作品を評価し、自分の考えをまとめている。【イ－④】 ・小説における言葉の意味について理解し、その効果などを考えて、内容の理解に役立てている。【ウ－③】 	<ul style="list-style-type: none"> ・観察 ・記述の分析 ・発言の内容
第三次	5	<ul style="list-style-type: none"> ・第二次での交流や記述をもとに、『高瀬舟』についての書評を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・第二次で学んだことを生かしながら、書評を書こうとしている。【ア－⑤】 ・構成や展開、表現や登場人物の設定について、具体的な根拠を示しながら、書評を書いている。【イ－⑤】 	<ul style="list-style-type: none"> ・観察 ・記述の分析

6	・自分が書いた書評を交流し、作品を読み深めることができる。	・他の学習者と積極的に交流し、自分の考えを深めることができる。【ア－⑥】 ・具体的な根拠に注目しながら、構成や展開、表現の仕方や登場人物の設定の仕方について評価している。【イ－⑥】	・観察 ・記述の分析 ・発言の内容
---	-------------------------------	---	-------------------------

5 本時について

(1) 主題

文学的文章における構成や展開、表現についての評価。

(2) 指導目標

客観的な根拠を示させながら文章を評価させ、自分の考えをまとめさせる。

(3) 評価規準

- ①自分の考えを具体的にもって交流し、考えを深めようとしている。 【関心・意欲・態度】
- ②登場人物の設定の仕方について、他の作品と比べるなどして作品を評価し、自分の考えをまとめている。 【読むこと イ】
- ③構成や展開や表現について具体的な根拠をもちながら作品を評価し、自分の考えをまとめている。 【読むこと ウ】
- ④小説における言葉の意味について理解し、その効果などを考えて、内容の理解に役立てている。 【言語についての知識・理解・技能】

(4) 指導の構想

本時は、学習材である『高瀬舟』に対する自分なりの根拠を持った評価を、協働的な学習を通してさらに自分の考えを深めていくことをねらいとしている。特に、グループでの話し合いや全体交流を通して、作品を多角的にとらえることで、作品の内容をさらに深く理解していくことを期待したい。

前時に、生徒はクラスメイトの感想中にあった『高瀬舟』への評価について、具体的な根拠を示すことでより客観性のある評価にし、書評に近づける学習を行った。具体的な記述がもつ特徴をとらえ、それが作品に及ぼす効果を分析することが、作品の評価につながるということを確認した。その学習をもとに、『高瀬舟』に対する自分の評価についても、作品を評価するための根拠を探させた。後半にはペアで交流することによって、根拠が妥当であるかどうかを確認した。本時は前時にまとめたその根拠とその評価をグループで交流し、自分の読みを深化させる時間である。

本時は、異なる視点で書いた者同士で自分の作品への評価とその根拠をグループ内で発表しあう。ここでは、視点が異なる生徒同士でグループを組むように意図的に指導者側で仕組み、活動させる。視点の異なる者同士なので、説明する側は言葉を補って分かりやすく丁寧に説明する必要がある。また、説明を受ける側は、その説明を理解するために、改めて別の視点で『高瀬舟』を読む必要がある。この交流の際には、教科書を開き、根拠をしっかりと把握しながら進めること、そして疑問点は納得するまで質問することをしっかりと押さえさせたい。質問をしたり質問に答えたりすることで、さらに『高瀬舟』を深く読むことにつながる。この交流によって『高瀬舟』をさらに多角的に読むことをねらっている。他の人の分析が自分の評価に

生かせるかを考えさせ、自分の分析と総合させて、また新たに自分の考えを再構築していく。特に、情景描写に登場人物の心情を重ねている最後の場面や、小説における「庄兵衛」の役割など、他のグループの生徒にとっても新しい読み方や解釈のきっかけになりそうなところについては、そのグループの話題を全体で取り上げて、自分自身の分析を振り返る手助けとしたい。

終末では、協働的思考を受けて結論付けた自分の考えについてまとめさせる。本時の授業を通して、終末で得た考えがどのような過程を経て生まれたかを学習シートに書かせ、本時の学びのメタ認知を図りたい。

(5) 本時の展開

<p>■前時の学習内容</p> <p>○「登場人物の設定」「構成」「展開」「表現」について、任意の視点に沿って個人で文章を評価している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「登場人物の設定」…登場人物の人物像，作品上での役割 ・「構成」「展開」…<u>冒頭の入り方</u>，<u>末尾の結び方</u>，<u>語り手の視点</u>など。 ・「表現」…文末表現，表現技法，表記，<u>和語・漢語・外来語</u>など。 <p>○作品を評価するために、評価語とともに、<u>具体的な根拠</u>を示している。</p>				
段階	学習活動	学習内容	時間(分)	学びの本質とのかかわり
導入	1. 本時の学習課題を確認し、見通しを持つ。	<p>【分析読みの視点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○「登場人物の設定」 <ul style="list-style-type: none"> ・人物像 ・作品上での役割 ○「構成」「展開」 <ul style="list-style-type: none"> ・冒頭の入り方・末尾の結び方 ・語り手の視点 ○「表現」 <ul style="list-style-type: none"> ・文末表現 ・表現技法 ・表記 ・漢語・和語・外来語 <p>【作品を評価するうえでの留意点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○評価の根拠を明らかにすること ○根拠を支える具体例を示すこと 	5	
	<p>【学習課題】</p> <p>様々な視点で作品を読み、『高瀬舟』を評価しよう</p>			
	2. 別の視点で書いた者同士のグループで意見を交流する。	○根拠の妥当性	20	<p>■協働的学び</p> <p>他者の考えを共感的に聞き、自分の考えと</p>

展 開	<p>【グループ交流】</p> <p>①テーマ：別の読みの視点で書いた分析を交流し、自分の分析と比べ、生かせるところや疑問に思うところを出し合い、根拠の客観性を高めよう。</p> <p>②方法：異なる視点の者同士の4人グループとする。</p> <p>③進め方：発表者が司会を兼ねて自分の考えを説明し、質問を受けたりしながら、自分の考えを深めていく。</p> <p>④帰着点：他者との考えを比較しながら、個人の考えを深め、自分なりの作品への評価をする。</p>		<p>比較したり、質問・説明したりしながら理解を深める。</p>
	<p>【想定される効果および根拠となる具体的な記述】</p> <p>〈冒頭の入り方〉〈登場人物の設定〉</p> <p>○冒頭で、いきなり登場人物などを登場させず、当時の一般的な高瀬舟の説明を静かに語ることで、これからの「喜助」と「庄兵衛」の話の特殊性を際立たせている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・徳川時代に京都の罪人が遠島を申し渡されると、<u>本人の親類が牢屋敷へ呼び出されて、そこでいとまごいをする</u>ことを許された。 ・場合によって非常に悲惨な境遇に陥った罪人とその親類とを、<u>特に心弱い、涙もろい同心が宰領してゆくことになると、その同心は不覚の涙を禁じえぬのであった。</u> <p>〈末尾の結び方〉〈登場人物の設定〉〈語り手〉</p> <p>○末尾の「しだいに更けてゆく朧月夜に、沈黙の人二人を乗せた高瀬舟は、黒い水の面を滑っていった」という表現では、語り手の視点の角度が遠くなるとともに、前述の弟殺しの場面と対照的な静けさを取り戻している。このことが、迷う「庄兵衛」、悲劇の「喜助」の印象をさらに深いものにしていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・そうは思っても、庄兵衛はまだ<u>どこやらにふに落ちぬものが残っている</u>ので、なんだかお奉行様にきいてみたくてならなかった。 ・しだいに更けてゆく朧夜に、<u>沈黙の人二人を乗せた高瀬舟は、黒い水の面を滑っていった。</u> <p>〈語り手〉〈登場人物の設定〉〈主題〉</p> <p>○一般的な人物の代表であろう「庄兵衛」が思案する場面では、語り手は「庄兵衛」に近づく。そのことが、読者が「庄兵衛」の揺れる心情に重なり、「知足」「安楽死」の問題がより読者に迫る印象がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いったいこの懸隔はどうして生じてくるだろう。ただうわべだけを見て、それは喜助には身に係累がないのに、<u>こっちにはあるからだ</u>といってしまえばそれまでである。しかしそれはうそである。<u>よしや自分が独り者であったとしても、どうも喜助のような心持ちにはなれそうにない。</u> ・それが早く死にたいと言ったのは、苦しさに耐えなかったからである。喜助はその苦を見ているに忍びなかった。苦から救ってやろうと思って命を絶った。それが罪であろうか。 <p>〈登場人物の設定〉〈漢語・和語・外来語〉〈主題〉</p> <p>○「知足」「安楽死」のみのテーマであれば、「喜助」の存在だけでも書くことができようが、同心「庄兵衛」が物語に登場することで、「権威」という新たなテーマが隠れているようにも思われる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これは上へ通ったことではないが、<u>いわゆる大目に見るのであった、黙許であった。</u> ・<u>しよせん町奉行所の白州で、表向きの口供を聞いたり、役所の机の上で、口書を読んだりする役人の、夢にもうかがうことのできぬ境遇</u>である。 ・そうは思っても、庄兵衛はまだ<u>どこやらにふに落ちぬものが残っている</u>ので、なんだかお奉行様にきいてみたくてならなかった。 		
	<p>3. 一つのグループの討議の様子を全体で交流する。</p>		<p>15</p>

	4. グループ交流や全体交流で考えたことを個人でまとめる。		5	■批判的思考力 根拠の妥当性を考えながら、自分の考えをまとめる。
終末	5. 本時の学習を振り返る。 6. 次時の学習の見通しをもつ。		5	■メタ認知 グループ交流を通して考えたことの変容や学んだことを、学習シートを客観的な資料として振り返る。
■次時の学習内容 ・単元の学習を振り返り、第二次の学習をもとに書評を書く。				

【参考文献】

- ・ 井上敏夫（1982）『井上敏夫国語教育著作集4 生活読みの理論と実践〈Ⅲ〉』（明治図書）
- ・ 夏目武子（1985）「印象の追跡としての総合読み——『高瀬舟』を中心に——」教育科学 国語教育 No.348（明治図書）
- ・ 菅聡子（2001）「森鷗外『高瀬舟』を〈読むこと〉」 田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力 中学校編3年－3』（教育出版）pp134～147
- ・ 角谷有一（2001）「プロットの読みを深める」 同上 pp148～162
- ・ 三好行雄（1977）『日本近代文学研究必携』（学燈社）
- ・ 吉田精一（1971）『森鷗外全集3』（筑摩書房）
- ・ 松川利広（2007）「PISA型読解力の向上をめざした実践研究——書評を書く活動（国語科）を通して——」（奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要）
- ・ 松川利広（2008）「PISA型読解力の向上をめざした実践研究——複眼書評の実践を通して——」（奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要）
- ・ 齋藤知也（2009）「教室でひらかれる〈語り〉——文学教育の根拠を求めて」（教育出版）
- ・ 『子どもにとって魅力ある単元をつくる 「読むこと」編』（2014）（岩手県立総合教育センター）
- ・ 『平成27年度 全国学力・学習状況調査解説資料』（2015）（国立教育政策研究所）